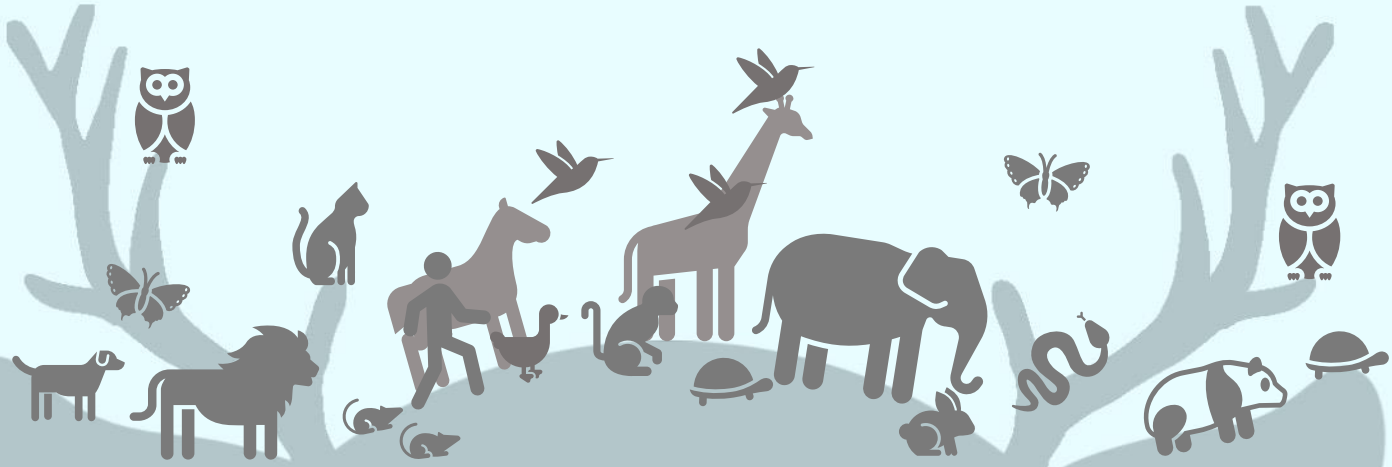


第17回大会
日本人間行動進化学会

広島修道大学

2024年12月7日（土） 8日（日）

日程

12/7（土）

12:00〜	受付開始（昼食としてパンを提供、なくなり次第終了）
13:00〜	実行委員会挨拶
13:10〜14:30	口頭セッション 1 (20 分 × 4 本)
14:30〜14:45	休憩（15 分）
14:45〜16:05	口頭セッション 2 (20 分 × 4 本)
16:05〜16:15	休憩・移動（10 分）
16:15〜17:00	ポスターセッション 1 (29 件、45 分)
18:00〜	バスで懇親会場に移動
19:00〜	懇親会（会場：モーリーマロンズ） 住所: 〒730-0034 広島県広島市中区新天地 1-20 広島帝劇会館 4F

12/8（日）

8:00〜	受付開始
9:00〜10:20	口頭セッション 3 (20 分 × 4 本)
10:20〜10:35	休憩（15 分）
10:35〜11:35	招待講演: 岸上伸啓先生（人類学）
11:35〜12:20	ポスターセッション 2 (27 件、45 分)
12:20〜13:50	昼食（希望者にお弁当無料提供: 要申込） 理事会（会場 2F の 3102 教室）
13:50〜14:20	総会
14:20〜14:35	休憩（15 分）
14:35〜15:35	口頭セッション 4 (20 分 × 3 本)
15:35〜16:15	諸連絡、若手発表賞授与、閉会挨拶

大会について

● 大会サイト

https://sites.google.com/hbesj.org/hbesj2024/

● 参加資格・参加費

参加資格: 参加・発表時点で HBES-J 会員（正会員・学生会員・準会員・賛助会員）である方のみ参加できます。参加費: 正会員 3,000 円、学生会員・準会員・賛助会員 2,000 円

口頭発表などの一部プログラムは zoom 等での中継を予定しています。参加申込は必要ですが、視聴は無料です。

● 若手発表賞

発表時点で学生もしくは学位取得 5 年以内の方が第一発表者である場合、若手発表賞の審査対象となります。

発表申込時に自己申告された方を対象とし、みなさまの投票により計 3 件を選出します。

● 会場に関してお伝えしたい点

大会の省力化のため、クローク・託児所については本年度は設置しておりませんが、ご事情に応じてサポートが必要な方はご相談いただけると幸いです。

お手荷物については、教室の隅のスペースに置いていただくことができます。

他にも会場について気になる点や相談したい点がありましたら conf2024[at]hbesj.org にお問合せください（[at]を半角@に置換してご送付ください)。

● ハラスメント防止に関するお願い

セクシャルハラスメントをはじめとするハラスメントに抵触する行為を防止するようにお願いします。見かけた場合については、止める、報告する等のご協力をお願いします。

報告は大会実行委員に口頭でするか、お問合せのメールアドレス（conf2024[at]hbesj.org）にお願いします。
これは、学会会場内のみではなく、懇親会、帰り道、学会参加者での二次会会場なども含みます。

例えば、以下のような行為の防止にご協力ください（これはあくまでもいくつかの例です)。

- 身体接触
- 脅迫・恫喝
- つきまとい
- 性的な言動・要求
- 参加者に対する根拠の無い噂の拡散
- 繰り返し SNS 情報や連絡先を尋ねる

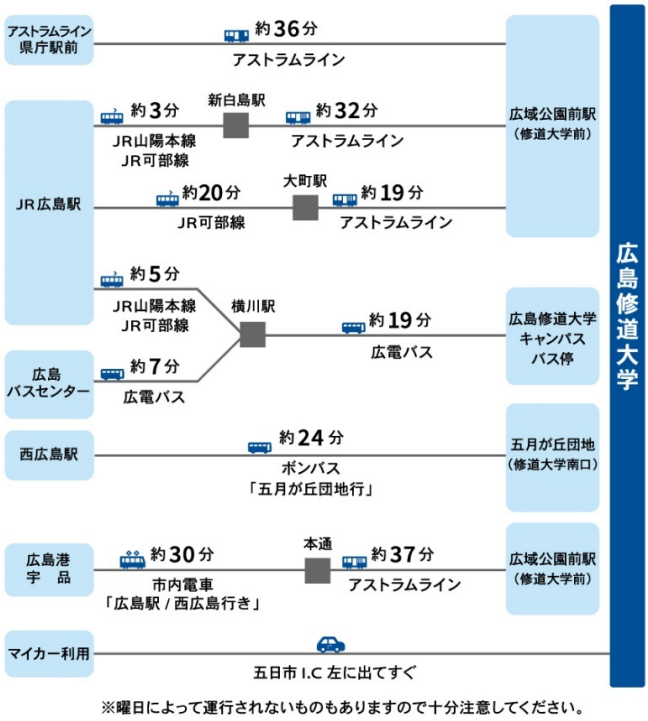
会場について

● 会場

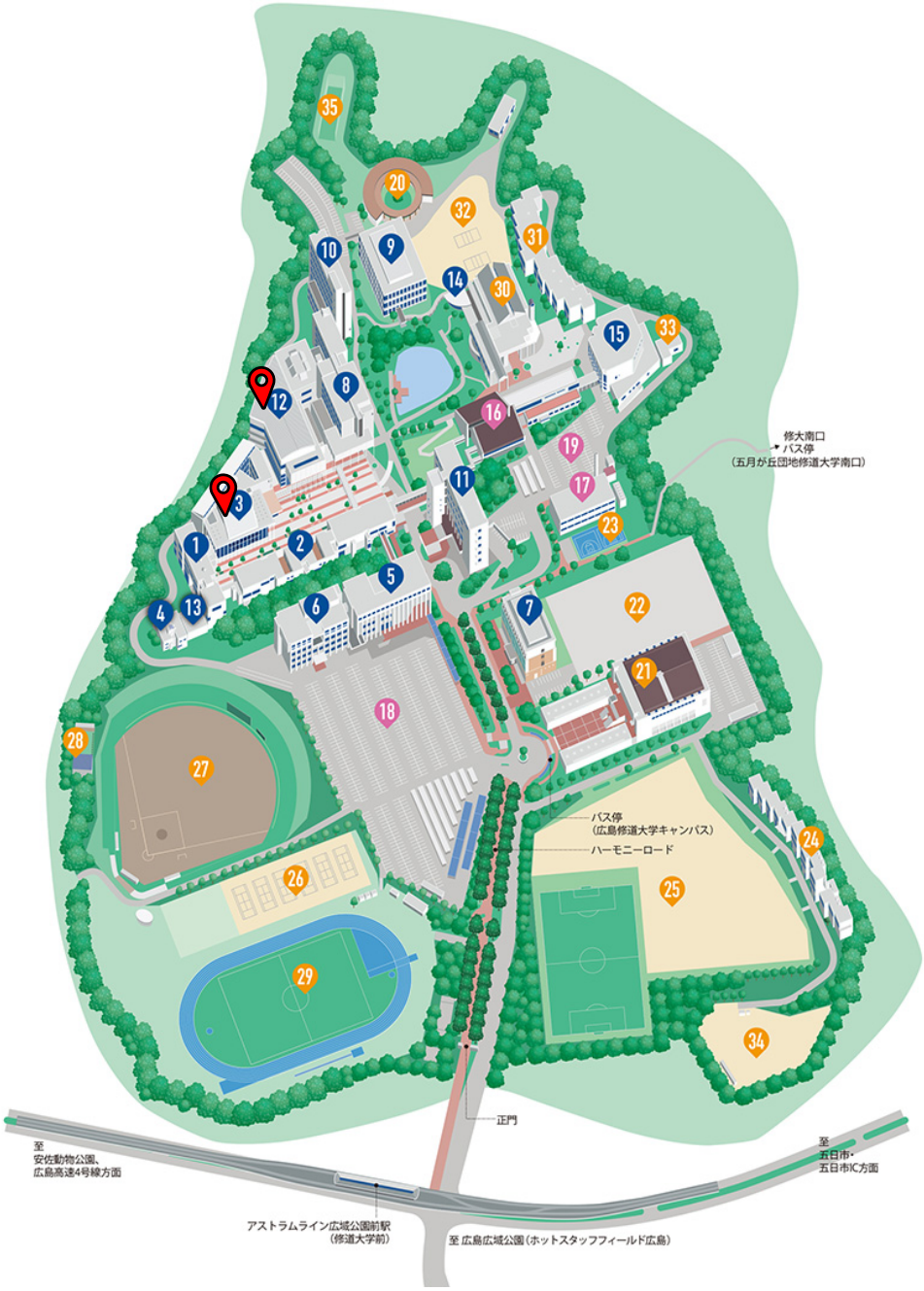
広島修道大学

〒731-3195 広島市安佐南区大塚東１丁目１番１号

- メイン会場は３号館 (3101 教室)
- ポスター会場は図書館 M2 階



JR「広島駅」から JR「新白島駅」下車、
アストラムライン「新白島駅」から
「**広域公園前駅**」がおすすめです！



教育・研究ゾーン

1. 1 号館
2. 2 号館
3. 3 号館
4. 臨床心理相談センター
5. 5 号館（教学センター）
6. 6 号館（情報センター）
7. 7 号館
8. 協創館（ひろしま未来協創センター、国際センター、学習支援センター）
9. 9 号館
10. 第 2 研究棟
11. 本館（キャリアセンター、入学センター、学生センター、事務局、法人本部）
12. 図書館（ラーニングコモンス）
13. 小学校課程実習棟
14. 音楽実習棟
15. 修大講堂

● ポスター会場（図書館、M2 階）
メイン会場 3 号館の隣、向かって右側の図書館に入ったところです。

● 受付
メイン会場（3101 教室）前に設置します。12/7（土）は 12 時から、12/ 8(日）は 8 時
より受付を開始します。参加費は、事前に会員登録システムからお支払いください。現金で
参加費をお支払いいただくことはできません。

● クローク・託児所（設置無し）
大会の省力化のため、クローク・託児所については本年度は設置しておりませんが、サポートが必要となる方はご相談ください。お手荷物については、会場の隅のスペースに置いていただくことができます。他にも会場について気になる点や相談したい点がありましたら conf2024[at]hbesj.org にお問合せください（[at]を半角@に置換してご送付ください）。

● LEBS 編集委員会
12/2（土）12:00 より、3 号館 2 階 3201 教室にて開催します。オンライン参加される方には、事務局よ
りメールで zoom 接続情報をお知らせします。

● HBES-J 理事会
12/8（日）12:20 より、3 号館 2 階 3201 教室にて開催します。オンライン参加される方
には、事務局よりメールで zoom 接続情報をお知らせします。

● 総会
12/8（日）13:50 より、メイン会場（3101 教室）で開催します。

● 会場内 Wi-Fi
会場全体で eduroam をご利用いただけます。

● 昼食・休憩
1 日目（土曜日）はパンを提供します（なくなり次第終了)。
2 日目（日曜日）は昼食（からあげとおにぎりのお弁当: むさしの若鶏むすび）を無料でご用意します（数には限りがあります)。参加申込の際に「昼食不要」を選択された方には、お配りできませんので、ご了承ください。

休憩時間中に、メイン会場（3101 教室）でコーヒー、お菓子を提供します。メイン会場の向かいのラウンジにソフトドリンクの自販機もありますので、そちらもご利用ください。

● キャンパス内のカフェ・ショップ

キャンパス内に、カフェやショップはありません。広域公園前駅から歩いて 3 分程度の場所にファミリーマートがありますので、会場に来られる前にそちらをご利用ください。

● オンラインでの視聴について

事前に登録した方に配信のリンクを添付したメールを送信します。
配信は口頭発表と総会のみを予定しております。
オンラインでの質問は申し訳ございませんが受け付けておりません。

● 懇親会について

懇親会は 2024 年 12 月 7 日（土）19:00 からモーリーマロンズ（2013 年と同一）で行います。
会場住所：〒730-0034 広島県広島市中区新天地 1-20 広島帝劇会館 4F

18 時頃から会場からバスで複数回に分けて移動する予定です
懇親会の参加費は、有職者 5000 円、学生 2000 円（学生会員・準会員の会員種別にかかわらず）です。参加するには、事前申込が必須となります。当日参加はできません。

大会実行委員会

中西 大輔（広島修道大学）委員長

小宮 あすか（広島大学）

八木 彩乃（広島修道大学）

五百竹 亮丞（広島文教大学）

中分 遥（北陸先端科学技術大学院大学）

須山 巨基（安田女子大学）

井上 裕香子（安田女子大学）

招待講演（12 月 8 日 10:35~11:35）

岸上伸啓先生（国立民族学博物館名誉教授，総合研究大学院大学名誉教授）

現代の狩猟採集社会における食物分配について：アラスカのイヌピアットとカナダのイヌイットの事例を中心に

文化人類学者は、現地社会でのフィールドワーク（参与観察やインタビュー）によって人間の活動に関する調査を行う。私は 1984 年よりカナダ・イヌイットやアラスカのイヌピアットらの極北地域の狩猟採集社会において狩猟・漁労活動や社会・文化変化に関する調査を行ってきた。この 40 年のうちに社会は大きく変化してきたが、彼らの間では現在でも食物分配が実践され続けている。

食物の分配はボノボやチンパンジーなどでも知られているが、「与える分配」や「交換」は人間に特徴的な行動であると言われている。本講演では、世界各地の狩猟採集社会の食物分配の多様なやり方や形態について紹介した後、イヌイットとイヌピアットの食物分配の事例を紹介し、その変化と多面的機能・効果について検討する。

イヌイットやイヌピアットの食物分配には下記のような多面的な機能・効果そして変化が認められる。

（1）経済的機能・効果：食料が無い人もしくは世帯が入手でき、生存の可能性を高める。また、コミュニティ内や拡大家族内での食料資源の平準化の効果がある。

（2）社会的機能・効果：食物分配を通して特定の社会関係が確認され、生成・維持される。

（3）文化的機能・効果：食物分配は、コミュニティのアイデンティティやイヌイット/イヌピアットとしてのアイデンティティを生成・維持させる。

（4）政治的機能・効果：食物の送り手は、コミュニティ内で名声や社会的評価を受け、より大きな影響力を持つ。

（5）心理的機能・効果：食物の送り手は他の人に食物を与えることによって文化的満足を得る。一方、食物を受け取る方は負債感や負い目を持つ可能性が高い。

（6）現金経済の浸透によって食物分配の範囲が狭くなり、頻度が減少しつつあるが、現在の生業・現金混交経済システムのもとでは、食物分配は有効な社会的・経済的・環境的適応手段であり、当面は実践され続けられると予想できる。

参考文献

岸上伸啓（2007）『カナダ・イヌイットの食文化と社会変化』世界思想社。

Kishigami, N. (2004) A New Typology of Food Sharing Practices among Hunter-Gatherers, with a Special Focus on Inuit Examples. *Journal of Anthropological Research* 60: 341-358.

Kishigami, N. (2021) *Food Sharing in Human Societies: Anthropological Perspectives.* Springer.

口頭発表一覧

※「★」がついている発表 は若手発表賞の対象発表です。また、「◎」がついている発表は全ての内容について、 「〇」がついている発表は一部の内容について、発表内容について SNS で言及していただけます（〇と◎がどちらもついていないものは SNS 言及不可です）。

Session 1 （12 月 7 日 13:10~14:30） 座長：板尾健司

O01★◎人口転換における二つの普遍的経路

板尾健司（理化学研究所）

人口転換、すなわち近代における死亡率と出生率の低下は極めて多くの国に一般的な現象だが、両指標の変動の定量的なパターンにまで一般性が見られるかは不明である。そこで、国連データを用いて、１９５カ国の直近２００年間の粗出生率（人口千人あたりの出生数）λと平均寿命 e_0 の間の関係を調べた。すると、各国における両指標の変動が λe_0 または $\lambda \exp(e_0/18)$を一定とする二つの普遍的な経路のいずれかに沿っていた。これは人口転換における二つの普遍的な相の存在を定量的に特徴づける。関連指標を解析すると、前者では乳幼児死亡率が高く、人口成長率が一定であること、後者では乳幼児死亡率が低く、一人当たり GDP 成長率が一定であった。ついで、親による子供への投資に関する出産と教育の間のトレードオフをモデル化した。その解析により、平均寿命が増大すると国々は自発的に第一の相から第二の相へ移行することがわかった。

O02★スパーシャル AI と法：道路交通に関する法情報を帯びた空間におけるエージェントのシミュレーション

大塩浩平（明治大学）

本研究は交通事故リスクの低減とエージェントの安全行動促進を目的として，交通事故判例データを用いたスパーシャル AI 開発と，エージェントのシミュレーションを行うものである．最高裁・広島高裁・広島地裁・家庭裁を含めた交通事故に関する約 1600 件の判例データをもとに，事故の発生場所，原因，道路状況，速度制限，信号無視などのリスク要因を抽出し，スパーシャル AI がこれらの情報を学習・解析することで，適切なナッジや安全指示を提供するシステムの開発を行なった．シミュレーションには広島の OpenStreetMap と SUMO を用い，特定の条件下での事故リスクやエージェント行動の変化を詳細に観察・分析する．また，スパーシャル AI は法情報に基づきエージェントの行動が法律に準拠するよう動的に誘導する．これにより，事故リスク低減のための効果的な都市設計に貢献できる可能性を示すものである．

O03★◎音象徴と言語の恣意性を表現する Bayesian Iterated Learning Model

八丸世旺（九州大学大学院）
関元秀(九州大学)

繰り返し学習モデル(ILM)の枠組みを応用し、言語と文化の変化を説明する諸モデルが提案されてきた。

言語における音と意味の関係は一般に恣意的であり、必然的な対応関係はないとされる。しかし擬音語など一部の語には、音と意味の間に潜在的対応関係(音象徴)が観察される。恣意性と音象徴は言語の普遍的特徴であり、両者の関係性の解明は言語の本質的理解への重要な手がかりとなる。しかし既存研究の多くは、音と意味の対応を考慮したモデルは十分に検討されていなかった。

本研究では、先天的な音象徴的バイアスをもちながら音と意味の対応をベイズ推論するエージェントによる ILM を構築した。さらに学習者が、その時点で意味を確信できない音や、予期と異なる意味に対応づけられた音を無視する性質に対応する各種フィルタリング機能を導入した。これらの要素の相互作用により、音象徴的特徴の仮定がある上で恣意性が創発されるメカニズムを考察する。

O04★◎文化形質の切替えが祭儀等イベント時に起こるとき、同調性バイアスがないにも関わらず初期頻度が普及の決め手となる

吉﨑凜人（九州大学大学院）
関元秀（九州大学）

文化形質の内在的魅力と多数派同調傾向は、生物遺伝にない文化伝達特有のメカニズムとして広く研究されてきた。魅力と同調傾向を同時に考慮した数理モデルで、同調傾向が強い集団では魅力的な形質でも初期に少数派ならば消失すること等が示されている。

これらの研究は形質 A 採用個体が B へ切替える隣で、別個体は B から A へ切替えるような一斉アップデートを想定してきたが、現実には形質切替えが祭儀等のイベントと連動し、A に関するイベントでは B から A への切替えのみが生じる事例も多い。

本研究は A 関連イベント、B 関連イベントが交互発生する状況を数理モデル化した。

このモデルでは同調伝達モデル同様、形質の普及が初期頻度に依存することがわかった。この際、関連イベントが先行する側の形質は初期に少数派でも固定しうる。さらに内在的魅力を組み込むと、魅力と同調傾向のカップリングモデル以上に複合的な初期頻度依存性を呈することがわかった。

Session 2　（12 月 7 日　14:45~16:05）　座長：新井さくら

O05◎進化精神医学に関する諸仮説の検討

髙野覚（明雄会本庄児玉病院）

演者は人類学を学んだ後に精神科医となり、これまで 20 年以上精神科臨床に従事してきた。そして、精神科医療現場に数多くみられる精神疾患への過剰診断（とその結果としてのセルフスティグマ）や過剰投薬などへの問題意識を次第に強めるようになった。それを是正しうる視野を持つものとして、演者は２０１７年頃より日本精神神経学会学術総会や各種講演などで「進化精神医学」についての啓蒙と探求を続けてきた。本発表では既存の概念も示しつつこれまで演者が示してきた「不安閾値の仮説モデル」などの考え方や、「自己家畜化」と精神疾患との関連についての仮説の是非などを問いたい。

O06★◎協力評判管理メカニズムの発達経路：子どもはいつから他者の目だけでなく将来の相互作用の可能性を考慮するようになるか？

新井さくら（東京大学，日本学術振興会）

未就学児において、他者に見られている際に協力的にふるまう傾向が確かめられている。一方成人では、観察者の存在のみならず、観察者と将来協力的に相互作用する可能性も踏まえて協力意欲が調節されており、協力相手として選ばれるよう評判を管理するメカニズムの存在が示唆される。しかし、成人のような評判管理がいつから見られるかは、同一の尺度で異なる発達段階を比較した研究がなく、全く不明である。本研究は、協力評判管理メカニズムの発達経路を明らかにするために、小・中学生 471 名を対象にオンライン実験を行い、観察者の有無および観察者との将来の相互作用可能性を操作した際の協力行動を測定した。未就学児や成人での知見とは逆に、低学年以上の就学児は観察者がいる際に非協力的にふるまう傾向にあった。成人での追試では観察者の存在が知見通りの効果を示したことから、メカニズムが思春期を介して非線形的な発達経路を取ることが示唆される。

O07★Effects of bonus and sanction on the evolution of cooperation in the finite linear division of labor where the process never stops for defection

Md Sams Afif Nirjhor（Institute of Science Tokyo）
Fangyue Liu (Institute of Science Tokyo)
Mayuko Nakamaru (Institute of Science Tokyo)

We study cooperation in a finite linear division of labor where groups of cooperators and defectors handle divided tasks. The system continues after defection which degrades products. Players earn bonuses based on cooperation levels. We found that sanctions on defectors boost cooperation, varying bonus functions have varying effects, and the evolution of cooperation is profit-independent.

O08★人はなぜ不平等場面の目撃を避けようとするのか -直接罰と間接罰の比較-

三石宏大（大阪公立大学）
河村悠太（大阪公立大学）

第三者罰ゲームでは、他者の利己的な行動に対して、たとえ傍観者であっても個人的なコストを払って罰を与えることが一貫して示されている。しかし、従来の第三者罰ゲームでは、参加者は罰の選択を強制的に迫られる人工的な状況に置かれるため、日常と比較して罰行動が見られやすくなっている可能性がある。本研究では、不平等場面の観察を避けることが可能な場面選択型第三者罰ゲーム（SS-TPPG）を用いて、不平等の場面の目撃回避が生じること、その回避行動は罰の選択を避けたいという動機と不平等自体を目撃することを避けたいという動機に基づくことを示した。さらに、従来の第三者罰ゲームで用いられる直接罰に加えて、間接罰条件を追加したところ、間接罰ではそのような不平等場面の回避傾向が弱まることが見出された。

Session 3　(12 月 8 日　9:00~10:20)　　座長：村瀬洋介

O09★狩猟採集民の食餌幅選択及び農耕民との関係性を考慮した数理モデル

河西幸子(東京大学)
井原泰雄(東京大学)

狩猟採集民と農耕民の相互作用や共存は、文化人類学や考古学の分野から関心を寄せられるトピックである。本研究では、狩猟採集民と農耕民及び、狩猟採集民の利用する生物資源 2 種の存在を仮定する。この生物資源 2 種の利用価値には高低があり、特定の条件のもとで、狩猟採集民は価値の低い資源も利用するようになる。狩猟採集民と農耕民の関係性の分類ごとに、この 4 集団の個体群動態の力学系モデルを立てて解析を行い、狩猟採集民と農耕民の共存条件等について比較・考察する。

O10★教示を行うライフスケジュールの進化

下平剛司（総合研究大学院大学）
大槻久（総合研究大学院大学）

人間は、知識や技術の活用によって環境や生活を変化させてきた、文化に依存した生物種である。文化は模倣や観察、教示のような社会的な学習プロセスによって習得され、特に教示は知識や技術の効率的な学習を可能にする。一方で、教示は学習者のために時間・手間が必要な利他行動であり、他の生物種ではほとんど見られない。そのため、教示行動の進化は人類進化における謎の 1 つとなっている。

本研究では数理モデルを用いてライフスケジュールの観点から教示の進化を検討した。ここで、教示が子の知識・技術の学習効率上昇を通して子の繁殖力を高める一方で、教示に割く労力が大きいほど自身が繁殖に使える労力が減少する状況を仮定した。その結果、血縁個体以外への教示の可能性がある場合には、⑴模倣や観察による学習効率が高いと教示が進化しないこと、⑵教示の効果が十分に高い場合に限って教示が進化すること、が理論的に明らかになった。"

O11★◎社会学習の「深さ」をめぐる鶏と卵問題

森隆太郎（東京大学・日本学術振興会）
菅沼秀蔵（東京大学）
亀田達也（明治学院大学）

人間は隣人を観察して学ぶ動物である。社会学習の効果に関する研究は多いが、その影響が特定の状況にとどまる「浅い」ものなのか、異なる状況にも及ぶ「深い」ものなのかを区別する視点は少ない。仮に、人々があらゆる状況で互いを観察し続けられるなら、この区別は不要だろう。しかし、現実には似て異なる状況が数多く存在し、また個体の生存期間には限りがあるため、この前提は成立しない。本研究では、浅い/深い影響が個体と集団に異なる形での利益をもたらし、結果としてある種の「鶏と卵問題/ジレンマ」が生じることをエージェントベースシミュレーションで示す。具体的には、深い社会学習のみが集団に学習の蓄積をもたらすが、蓄積が進む前の段階では浅い学習が個体にとって有利になりやすく、蓄積性は限られた条件でしか実現しない。終わりに、このジレンマのもとで蓄積性が生じる範囲を広げる/狭める条件について議論する。

O12◎間接互恵性における社会規範の進化

村瀬洋介（理化学研究所）
Christian Hilbe (Max Planck Institute for Evolutionary Biology)

ヒト社会における大規模な協力行動を説明するメカニズムの一つに間接互恵性がある。
間接互恵性を適切に機能させるためには、「社会規範」が重要な役割を果たす。どのような社会規範があれば協力行動が生まれるかというのは、進化ゲーム理論において多くの研究の蓄積がある。しかし、これまでの研究では、ある社会規範がすでに確立しているという条件の下で、その社会規範が安定しているかどうかが主に議論されてきた。一方で、「そもそも協力がない状態からどのように協力を生み出す社会規範が進化してくるのか？」という問いは根源的で重要であるにもかかわらず十分に研究されてきていない。あり得る進化的な経路は膨大な数になり、解析が困難になるためである。
本研究では、富岳を用いた大規模計算のアプローチによりこの問題に取り組んだ。その結果、特にシンプルな L1 という社会規範が重要な役割を果たしていることが明らかになった。

Session 4　（12 月 8 日　14:35~15:35）　座長：高橋征仁

O13◎戦後日本における犯罪加齢曲線の崩壊―衝動性の健全化か幼形化か？

高橋征仁（山口大学）

戦後日本における暴力の減少に関して、長谷川・長谷川（2000）は、犯罪加齢曲線の存在を指摘することで、従来の社会科学のアプローチに代えて、生物学的・進化論的アプローチの有効性を示した。しかし他方、犯罪加齢曲線の崩壊理由としては、高学歴化による将来予期の安定化という認識を従来の社会科学と共有していた。本報告では、この「衝動性の健全化」仮説に対して、「衝動性の幼形化（家畜化）」仮説を提示したい。というのも、理論的には、そもそも学校教育が強い衝動性を健全化できるのかという疑念がある。また時期的にも、殺人率の低下は、団塊世代以前の「焼け跡世代」から急激に始まり、一方向的かつ断続的に続いている。さらに、衝動性の発生・発達という観点からみると、犯罪加齢曲線の崩壊は行動上のペドモルフォーシスとも考えられる。むしろ、戦争や産児制限運動、恋愛結婚によって、幼形化（家畜化）が進展したのではないだろうか。

O14 マッチングアプリにおける配偶者探索方略の検討

山田順子（立正大学）
須山巨基（安田女子大学）
中分遥（北陸先端科学技術大学院大学）
鬼頭美江（明治学院大学）

配偶者選択において、人は自分や子孫の生存により有利な特性を持った相手を選択しようとする。通常、配偶者が持つ特性については時間をかけて探索する必要がある。しかし、近年普及しつつあるマッチングアプリでは、配偶者候補が持つ特性を一覧できるという特徴がある。そこで本研究は、マッチングアプリを模した架空の異性プロフィールを作成し、配偶者選択における情報探索方略を検討した。大学生 61 名を対象に、架空の異性 8 名のプロフィールを作成した。プロフィールは相手の顔や年齢、職業など 10 項目から構成され、参加者は各項目を自由に探索した。分析の結果、男女で異なる情報探索方略のパターンが得られた。男性は相手女性にかかわらず一貫した情報探索方略を行う傾向にあった。一方、女性は相手男性によって情報探索方略を変える傾向にあることが示された。配偶者選択における情報探索方略の性差と、そのメカニズムについて考察する。

O15◎Parochial Cooperation in Nested Groups

CHIANG, Yen-Sheng（Institute of Sociology, Academia Sinica, Taiwan）

Parochialism—the tendency to cooperate more with ingroup members than with outgroup strangers—is a well-established human behavior. Over the past decade, evolutionary models and behavioral experiments have been proposed to explain how such behavior emerges. However, existing research in this area has primarily focused on the cooperation dilemma in a simple ingroup versus outgroup binary context. In contrast, real-world social environments, as shown by social psychologists, are often characterized by nested groups, where smaller groups are embedded within larger ones, highlighting a distinction between locality and globality. In this presentation, I introduce an evolutionary model and a game experiment to explore whether parochial cooperation can be sustained within nested groups. Specifically, in both the model and the experiment, players can signal which group (local or global) they identify with to their co-player. I examine how this type of 'social distance' signaling influences cooperative behavior within the nested group structure.

ポスター発表一覧

※「★」がついている発表 は若手発表賞の対象発表です。また、「◎」がついている発表は全ての内容について、 「〇」がついている発表は一部の内容について、発表内容について SNS で言及していただけます（〇と◎がどちらもついていないものは SNS 言及不可です）。

P01：★◎場面の規範性が評価懸念と利他行動意志の関係に与える調整効果”Kawamura ＆ Kusumi（2018）の追試研究”

清野幸歩（日本女子大学大学院）
石井辰典（日本女子大学）

他者評価への懸念は、利他行動を促進する一要因として近年注目されている。この関連を検討した Kawamura＆Kusumi（2018b）では、仲間が利他的（向規範的）な場面では、評価懸念が高い人ほど利他性が高まる一方、そうでない場面では逆に利他性が低まるという交互作用のパターンが見られており、評価懸念の効果が場面の規範性により異なることが示唆された。ただ、評価懸念が高いほど仲間に同調しやすいのであれば、向規範的場面における評価懸念と利他性の間には正の関連が期待されたが、その関連は統計的有意には至っておらず、利他性スコアにおける天井効果の存在が示唆された。そこで本研究では、元研究の方法を修正して追試を行った。その結果、天井効果は認められなかったが、評価懸念と場面の規範性の交互作用は統計的に有意ではなかった。なお本研究は、元研究の 4 シナリオのうち 1 つのみを用いており、さらなる調査が必要である。

P02：★◎競争は人に利他的な嘘をつかせるのか？

室伏紗希（名古屋工業大学）
小田亮（名古屋工業大学）

人には利他的な嘘をつく傾向があり、寄付は競争的利他主義を誘発する事、また内集団に対して積極的に利他行動をする事が知られている。では寄付で競争的利他主義を誘発された人はさらに寄付額を上げるために嘘をつくのだろうか。そこで本研究では参加者に 6 以外の出目の合計値×3 円を実験者が寄付すると教示したうえで、底に穴が空いた紙コップ内でサイコロを 10 回振り、穴から覗いて確認した出目を報告してもらった。参加者は匿名と顕名の 2 条件に分けられ、顕名条件では実験終了後に名前と寄付額がランキング形式で公開される。また寄付先として内集団である名工大の学生向け基金と外集団である UNHCR の 2 条件を用意し、匿名/顕名、内集団/外集団の 4 条件について出目の頻度分布と寄付額の平均を比較した。もし競争的利他主義が利他的な嘘を誘発するなら、内集団の顕名条件では出目が匿名条件よりも大きく報告され、寄付額が増加すると考えられる。

P03：★規範遵守のメカニズム：強化学習モデルによる探索的検討

笹川陽奈子（北海道大学）
竹澤正哲　（北海道大学）

人間は自己利益に反しても規範を遵守する。規範遵守は内面化と呼ばれる人間特有のメカニズムから生じると伝統的に考えられてきた。一方で、強化学習と呼ばれる生物に共通のメカニズムから生じる可能性についても論じられてきている。そこで本研究では、規範遵守を「期待値は低いが確実に利益が得られる行動」と定義し、モデルフリー学習、モデルベース学習の 2 つの強化学習モデルから規範遵守が生じるかどうかを検討した。その結果、両モデルにおいて強化学習エージェントは規範遵守を学習しうることが示された。このうち、モデルフリー学習は期待値が低くてもリスクの低い行動を選択する傾向があることが知られており、先行研究と一致する結果であった。そのほか、罰・報酬消失時の規範遵守、内発的動機付けの消失など内面化でなければ説明できないと思われた現象についても、強化学習で説明できる可能性が示された。

P04：★◎評価者の人数と利他行動に対する評価の推測 ―階層ベイズモデルによる検討―

原田瑞穂（名古屋大学）
五十嵐祐（名古屋大学）

他者に利益を提供する利他行動は，行為者の肯定的な評判を導く。しかし，利他行動を評価する人物（評価者）が必ずしもその行動を肯定的に評価するとは限らない。また，人々は，自身の否定的な情報に敏感であり，大規模な集団に対して多様な価値観を持つ成員の存在を推測する。本研究では，評価者の人数が利他行動に否定的な評価者に対する見積もりに与える影響について，階層ベイズモデルによる検討を行った。実験（N＝201）では，参加者自身が利他行動を取る架空のシナリオを呈示し，特定の人数の評価者（1 人，5 人，15 人，50 人，150 人，500 人）の中で，その行動を肯定的（否定的）に評価する人数を回答するよう求めた。分析の結果，評価者の人数の効果はみられず, 利他行動に否定的な評価者は, 人数によらず一定の割合で推測される可能性が示唆された。今後は，この推測の背後にある心理的メカニズムを詳細に検討する必要がある。

P05：★属性依存的な罰の文化進化に関する数理モデル研究

三好玲人（東京大学）
井原泰雄（東京大学）

ヒトの社会には性別などの属性に依存した罰や評価が存在する。その対象となる行動は経済的な機能を持つ行動から服装の選択のような恣意的な行動まで様々である。

このような属性依存的な評価は初めて見る架空の属性に対してもなされることが心理実験により示されている。このことは、特定の属性を持つ個体に特定の行動を強いる罰というよりも属性に非典型的な行動をすることに対する罰として属性依存的な罰を理解できる可能性を示唆している。

罰は主に協力を安定化する仕組みとして注目されてきたが、任意の行動を安定化する恣意的な罰が進化しうることも文化進化の数理モデルによって示されてきた。本研究ではこうした先行研究の一つを拡張し属性依存的な罰の進化をモデル化した。解析の結果、属性に非典型的な行動に対する罰は行動が恣意的なものであっても安定的に維持された。また進化する罰の性質に社会経済的な環境が影響することも示唆された。

P06：★全員一致規則の集合知：議論の時間的ダイナミクス・モデルによる検討

竹西海人（北海道大学）
竹澤正哲（北海道大学）

集団での話し合いは意見が一致するまで続くことが多い。だが，頑なに意見を曲げない成員のせいで話し合いが長引き，その強固な意見に多数派が屈服することもある。なぜ人間は，様々なリスクを孕むにもかかわらず，全員一致規則に依拠して話し合いを進めるのか？本研究は集合知の観点から全員一致規則を再評価する。集団意思決定が集合知を生み出すには，個人の意見を確信度によって重み付け集約することがベイズ的最適解であることが知られている。しかしながら，確信度の個人間比較は困難であるため，最適解の実現は難しいと考えられてきた。これに対し本研究は，確信度が各個人の内部で意見変容に影響しさえすれば，全員一致規則によって最適解が近似的に実現できることを示す。シミュレーションの結果，一定の条件の下で全員一致規則は多数決やベストメンバーよりも優れた成績を収めた。

P07：★◎原因の統制可能性と相手の行動傾向は同情に影響するのか？

林奈津希（名古屋工業大学）
小田亮（名古屋工業大学）

同情は苦境にいる他者に感じる感情であり、援助行動を動機づけると考えられている。ではどのような人に対して同情するのだろうか？質問紙調査では、お返し能力の指標である困窮の原因の統制可能性と、お返しを行動に移すかどうかの指標である被援助者の行動傾向が、同情の程度にそれぞれ独立した影響を及ぼすことが明らかになった。しかし、ここでの「同情」は感情を尺度で事後的に測定した構成概念でしかない。そこで言語的指標(尺度)に加えて生理的指標(心拍数の変化)を用いて同情における原因の影響を検討したところ、生理的指標では原因の影響がみられなかった（前回大会で発表)。本研究では原因と行動傾向の２つを操作し、同情へのそれらの影響を前回と同じ２つの評価方法で検討した。言語的指標では先行研究と同じ結果になると予想される。生理的指標では、言語的指標と実際の感情にずれがある場合、言語的指標とは異なる結果になる可能性がある。

P08：★◎集団内のヒエラルキー構造は平和をもたらすか：シミュレーションによる検討

大坪快（東京大学）
大坪庸介　（東京大学）

伝統的な非中央集権的社会では、他集団の成員に対する小規模な襲撃（レイド）がより大規模な集団間紛争につながることが指摘されている。レイドを行う個人には物質的・社会的資源の獲得という利益がある一方、それが引き起こす集団間紛争の不利益は集団全体に降りかかる。Glowacki (2024)は、ヒトの進化史のある時期において、集団内のヒエラルキーのような複雑な社会構造の発達が成員の行動統制（レイドの抑止）を可能にし、その結果、長期的な平和が出現するようになったと論じている。本研究では、各個人はレイドを試みるか、監視や罰によってレイドを抑止するシステムに協力するかを選択すると仮定し、レイドの試みが 1 つでも成功すると平和が維持できないという前提でシミュレーションを行った。その結果、Glowacki の予測とは逆に、ヒエラルキー構造がある集団よりもない集団の方がレイドを抑止しやすい可能性が示唆された。

P09：★◎改訂版同調志向尺度の開発

藤川真子（広島修道大学）
井川純一　（東北学院大学）
横田晋大　（広島修道大学）
中西大輔　（広島修道大学）

情報的影響による多数派同調には正しい情報を獲得するという適応課題を解決する機能があると言われている。一方で，規範的影響にはコーディネーション問題を解決する機能があるのかもしれない。これら二つの動機に基づく多数派同調傾向の個人差を測定するための尺度として同調志向尺度（横田・中西, 2011）が存在するが，内的一貫性や行動指標との相関が不十分であり、尺度の改良が必要である。よって，本研究では，大学生（1 回目: n＝176; 2 回目: n＝178）を対象に，あらかじめ行った予備調査と同じ因子構造になるかを確証的因子分析で検討した。その結果，特に，情報的影響因子で予備調査と異なる結果が得られた。一方，どちらの調査にも参加した大学生（n ＝ 120）を対象に，再検査信頼性を確認した結果，作成した尺度の信頼性は十分高かった。

P10：★〇気候やヒト社会の特性がイヌの気質に及ぼす影響

松本藍（麻布大学）
松本悠貴　（麻布大学）
結城雅樹　（北海道大学）
James A. Serpell　（University of Pennsylvania）
永澤美保　（麻布大学）
菊水健史　（麻布大学）

ヒト社会では、気候に応じた生業スタイルが生まれ、それぞれのスタイルに適応的な気質をもった人々が独自の文化を作ってきた。家畜においても、スタイルごとに必要とされる気質は異なる可能性がある。本研究では、最も古く家畜化された動物であるイヌを対象とし、土地の気候に伴うヒトの文化や社会の在り方がイヌの気質に関わる遺伝子選択に関与したことで、犬種間における気質の差異が生み出されたという仮説のもと、気候、ヒト社会の特性、イヌの気質の間の関連について探索的研究を行った。

結果として、原産国の気温はイヌの攻撃性や恐怖、ヒトへの愛着の程度と有意に正に相関した。相互依存的な生業スタイルはヒトへの愛着の程度と有意に負に相関した。しかし、媒介分析では生業スタイルが気温とイヌの気質の関連を媒介する可能性は低いことが示唆された。これらの結果について考察し、今後の研究について提案する。

P11：★◎関連性理論に基づく意図解釈の実証的検討：認知効果・心的労力・解釈の関係性

箕輪朗（北陸先端科学技術大学院大学）
橋本敬（北陸先端科学技術大学院大学）

人間は他者と意図共有することで協調的な社会を作っていった。関連性理論によると意図解釈に認知効果と心的労力が影響を及ぼすとされる。文脈の想定と新しい情報が結びつき解釈が狭められると認知効果が生じて関連性が高まり、解釈が定まる。心的労力が大きい場合、高い認知効果を得られないと関連性が高まらない。本研究ではこの二つが発話の意図解釈に及ぼす影響を実証的に検討する。実験では、認知効果（弱・中・強）を文脈情報で調整し、心的労力をワーキングメモリ使用を伴う二重課題により変動させる。実験参加者は、文脈と会話テキストが提示され、その後二つの追加情報が提示され、各追加情報に対して会話中のある発話に対する意図解釈を行う。本研究では、意図解釈に用いられる心的労力が制限されると認知効果を十分に計算できず、関連性が高まらずに解釈が曖昧になると予測する。学会では得られたデータをもとに予測の妥当性と意義を議論したい。

P12：★ドーパミン D4 受容体遺伝子の DNA メチル化と集団主義傾向の関連

後藤日奈子（玉川大学）
李 述冰（玉川大学）・山田順子（立正大学，玉川大学）・石原暢（神戸大学，玉川大学）・仁科国之（大阪大学）・西谷正太（山梨大学）・佐々木哲彦（玉川大学）・松田哲也（玉川大学）・高橋英彦（東京科学大学）・村山美穂（京都大学）・高岸治人（玉川大学）

ドーパミン D4 受容体遺伝子（DRD4）の第 3 エクソンにある多型（48bp VNTR）は、これまで新規追求傾向や注意欠如多動性障害のみならず、文化的自己観といった文化特異的な心理傾向との関連が報告されてきた。発表者らは、DRD4 の多型において 2 回繰り返し（2R）を持つ人は 2R を持たない人に比べて、集団主義傾向が低いことを明らかにした。しかし、DRD4 の多型と集団主義傾向の関連の背後にあるメカニズムは以前不明である。本研究では、遺伝子発現を調節する役割を担う DNA メチル化に注目し、DRD4 の多型や集団主義傾向との関連を調べた。152 名の成人を対象に調べたところ、DRD4 で 2R 保有者は非保有者に比べてイントロンにある CpG サイトの DNA メチル化率が高いこと、メチル化率が高いほど集団主義傾向が低いこと、そしてメチル化が DRD4 の 2R と集団主義傾向の関連を媒介していることが明らかになった。

P13：★◎うつ関連遺伝子アレル頻度の地理的勾配を生み出した地域間環境格差に関する数理モデル：東アジアは過酷だったか？ユートピアだったか？

本屋敷健太（九州大学大学院）
関元秀（九州大学）

うつ病や不安障害には危険察知や、戦略変更を促す機能があるため、それらになりやすい形質が特定環境下で適応的であったと進化医学者は議論する。ヒトではうつ・不安の発症率を高める可能性のあるセロトニントランスポーター（5-HTT）遺伝子 S アレルと、野生型 L アレルの多型が維持されており、アフリカ～東アジア間で西低東高の S アレル頻度勾配が報告されている。S がリスク回避を促す可能性を踏まえ、本勾配は東アジアの環境の過酷さを反映するという説があるが、数理モデルによる検証を経ていなかった。本研究では、コストを払いリスクから逃避する確率が各個体の遺伝子型によって決定されると仮定した進化モデルを構築し、現状の勾配が形成される環境条件を特定した。東アジアの方が過酷な環境である場合に S アレル頻度は確かに西低東高となったが、それだけでなく正反対のアフリカの方が過酷な環境である場合にも同様の勾配が実現されうることがわかった。

P14：★統計モデリングを用いた社会的ジレンマゲーム下における持続的協力の原因解明 ～松本ら（2020）の実験データの再分析

成田達樹（青山学院大学）
水野景子（関西学院大学）
井上裕香子（安田女子大学）
清成透子（青山学院大学）

繰り返しのある社会的ジレンマゲーム(rSDG)では、初期の高い協力率が試行の進行と共に低下することが知られている。しかし、松本ら(2020)の実験研究では、4 条件被験者間要因配置で行われた rSDG の 1 条件において、原因不明の持続的な協力が観察された。そこで本研究では、統計モデリングによる二次的分析を通して rSDG における参加者の意思決定をモデル化し、協力の持続の原因解明を試みた。まず、水野・清水(2020)で提案された 4 つの意思決定モデルを比較し、基礎となるモデルを選定した。その結果、協力が持続した条件では、ゲームの利得構造と他者への協力の期待を学習するモデルが最も適合したが、それだけでは協力の持続を十分に説明できなかった。この結果を踏まえ、学習バイアスに着目してモデルの拡張を行い、協力の持続の説明を試みた。モデル比較等、詳細な結果については当日報告する。

P15：◎選択の合致がジレンマ状況での協力に及ぼす影響 ～松本ら（2020）の実験データの再分析

井上裕香子（安田女子大学）
松本良恵（淑徳大学）
高橋伸幸（北海道大学）
清成透子（青山学院大学）

互いに利益を得る相利協働の達成や、合唱やダンスのように同じ行動を一緒にすることが、混合動機状況（社会的ジレンマ；SD）における協力の進化に寄与した可能性が指摘されている（Tomasello ら, 2012)。松本ら（2020）は、集団内で選択の合致が最適解となる 3 種類の経済ゲーム、または PD ゲームを経験させた後（被験者間要因)、集団全体で繰り返し SD ゲームをプレイさせる実験を実施した。その結果、選択の合致自体によって利益が得られる運転ゲーム条件でのみ、持続的協力が生じた。本研究ではこのデータを再分析し、SD ゲーム初回に非協力者のいた群と完全協力の群に分類して検討した。分析の結果、初回に非協力者が一人でも存在する場合、運転ゲーム条件以外では協力率が早期に低下するのに対し、運転ゲーム条件では協力者が選択を変えにくい傾向が示された。これは、選択の合致への努力の効果を示唆している可能性がある。

P16：◎夫婦の顔の類似性と経年変化：日本人配偶者の同類婚的傾向の検証

能城沙織（木更津工業高等専門学校）

夫婦の顔の類似性について、先行研究では顔が似た相手を選ぶ同類婚的傾向と、結婚後の共同生活により顔が似ていく可能性の双方が示唆されている。しかし、近年の白人を対象とした研究では、経年で顔の類似性が増す傾向は見られないことが示された。本研究では、白人以外の集団に同様の傾向が見られるかを検証するため、日本人夫婦 20 組の顔画像を用い、結婚当初と経年後の顔の類似性を調査した。その結果、顔認識アルゴリズムと参加者の主観的評価には異なる結果が見られたものの、夫婦の顔が経年でより似る傾向は確認されなかった。このことから、同類婚的傾向は人種を超えた普遍的な現象である可能性が示唆される。また、顔認識アルゴリズムと主観的評価の差異は評価基準の違いが影響している可能性があるため、今後は評価方法のさらなる検討が必要である。

P17：儀礼と社会的結束に関するフィールド実験：広島県内の二つの事例の紹介

中分遥（北陸先端科学技術大学院大学，安田女子大学）
森井詩（安田女子大学）
横部朱慧（安田女子大学）
須山巨基（安田女子大学）

Whitehouse (2021)は、人間社会の複雑性の進化において、儀礼が重要な役割を果たしていたことを指摘している。儀礼は集団に共通のアイデンティティーを確立させ、社会的結束力を高めることが知られている。これまで、アイデンティティ融合尺度を用いた実験研究によって、宗教儀礼のみならず様々な儀礼が社会的結束に及ぼす影響について研究されてきた。本発表では、アイデンティティ融合尺度を用いて儀礼と社会的結束の関連を検討した本邦の研究事例として、発表者らが広島県内で行った二つの研究の概要を紹介する。これらは、共に昨年度中国四国心理学会で既に発表した研究である（森井・中分, 2023；横部・須山・中分, 2023）。

P18：初代「ポケットモンスター」を題材としたMCI理論の頑健性の検討

須山巨基（安田女子大学）
越水麻央（安田女子大学）
村上寧音（安田女子大学）
中分遥（北陸先端科学技術大学院大学，安田女子大学）

直観的な理解・期待に反する超自然的な概念やキャラクターは，世界中の民間伝承や宗教的文章に記載されている。Boyer（2003）は、こうした直観的な理解や期待に反する超自然的な存在や概念は多様だが、基本的にそれらの存在は存在論的な期待を少数破ることがあるとし、これをMCI理論（最小反直観理論）と呼んだ。本研究では、本邦の代表的な現代のキャラクターとして「ポケットモンスター（初代ポケモン）」に着目し、各キャラクターがどの程度直観に違反する性質を持つのか検討する。初代ポケモンは発売日が1996年であり、今日まで親しまれている。本研究では、初代ポケモンの何体がMCIであるかを検討するとともに、Boyer (2003) が予想するように、MCIのポケモンがMCIでないポケモンに比べて、人気であるのかを実際の投票結果に基づいて検討した。

P19：◎土偶形状の複雑さと人口動態は関係するか：考古データからPowell et al. (2009)を検証する

中尾央（南山大学）
金田明大（奈良文化財研究所）
田村光平（東北大学）
舘内魁生（東北大学）
中川朋美（名古屋大学）

Powell et al. (2009a，2009b)では，人口の増加が技術レベルの進化を促進するという仮説が提示されている．人口動態と文化進化の関係に関して幅広く言及されるこの仮説を，本研究では土偶の形状と縄文時代の人口データを用いて検討する．具体的には，ある程度残りの良い土偶の三次元データ400体弱を対象に，その複雑さを定量化した上で，小山（1978）のデータと比較し，果たして縄文時代における技術レベルの進化が，人口動態によって説明できるかどうかを検討した．暫定的には，人口増加は必ずしも技術レベルの進化には関わっていないという結論が得られた．

P20：★個人の情報および集団の情報が外集団への協力行動に与える影響（研究計画）

舘石和香葉（北海道武蔵女子大学）

ヒトは、しばしば相手がどのような人物かという情報を利用し社会的な意思決定（協力/非協力）を行う。ただし、相手が外集団の場合はその情報を入手しにくいため、相手個人ではなく所属集団の情報を参照する。こうした傾向がある一方、通信技術が発展した現代社会においては、外集団の相手であっても個人の情報が入手できるケースが増加しつつある。しかし、外集団の個人とその所属集団両方の情報が与えられた場合に、ヒトがこれらの情報をどのように処理し、社会的意思決定を行うのかは明らかではない。そこで、本研究は 2 つの実験を実施し、この問いを明らかにすることを試みる。実験 1 では、情報の内容を操作し、外集団の個人の情報・集団の情報両方が与えられた場合の協力行動を検討する。実験 2 では、 外集団を構成するメンバーの協力性を表す分布を呈示し、その分布の形状によって、外集団の個人への協力行動がどのように変化するのかについて検討する。

P21：★◎oTree と AI エージェントを融合させた社会的ジレンマの分析の検討(研究計画)

田中もも（北海道大学）

本研究では，ウェブ上で人の行動の意思決定を測定できるソフトウェアである oTree を用いることで，社会的ジレンマ（人々が利己的にメリットのある行動をすることで，社会的にデメリットが発生すること）に関するデータの分析を目指している。oTree を利用する際，一般には人がアンケートに回答する必要がある。一方，近年台頭してきた大規模言語モデルを活用することで，様々なタイプの職業や性格を有した（AI）エージェントにアンケートに回答させることができる可能性がある。ただし，先行研究として oTree と AI エージェントを融合させたアプローチを見つけることができなかったため，今現在，AI エージェントの活用に向けた準備を進めている段階である。具体的には，どのようなルール(報酬や罰の強さ)が逸脱行動を抑制して集団の利益を優先するような行動につながるのか，AI エージェントの会話を生成して，分析する予定である。

P22：★◎時間知覚変調における刺激の運動特性の効果(研究計画)

長谷川大（北陸先端科学技術大学院大学）
日高昇平（北陸先端科学技術大学院大学）

時間感覚は生物にとって重要な役割を果たし、ミリ秒から概日リズムまで幅広い範囲を持つ。中でも数百ミリ秒から数分の時間は、採餌や運動、意思決定において重要な意義を持つ。先行研究（Treisman, 1963 等）では、時間感覚が覚醒度や注意により変調される認知モデルが提案されてきた。しかし、近年の研究は刺激の運動特性が時間知覚に影響を与えることも示唆する。例えば、観察者に接近する物体の映像を見るとき、時間を長く感じ、遠ざかる刺激では時間を短く感じる傾向が報告されている（小野, 2010 等)。この現象は、捕食者や獲物が接近してくる際に衝突のタイミングを詳細に評価する必要があり、生存や狩猟成功率を高めるためにこのような時間知覚の特性が適応的であった可能性がある。本研究では、覚醒度や注意を統制し、外的要因である刺激の運動特性の効果が内的要因である覚醒度や注意と独立しているかを評価する心理学実験を行う。

P23：★◎デジタル環境における個人特性を考慮した大規模集団の社会的学習：仮想矢じり課題を用いた実験的研究(研究計画)

新保直樹（北陸先端科学技術大学院大学）
小林豊（高知工科大学）
中分遥（北陸先端科学技術大学院大学）

社会学習戦略の研究は、これまでに人々の社会的情報の評価と選択のメカニズムを明らかにしてきた。しかし、従来研究の多くは模倣の成功を前提とし、デモンストレーターも数名程度と限定的であり、現実の複雑な環境と乖離する場合がある。特に、デジタル環境では膨大な情報と多様な個人特性が存在するため、本研究ではこれらを考慮した社会学習のメカニズムを検討する。具体的には、仮想矢じり課題（Mesoudi & O'Brien, 2008）をベースに、(a)個体特性による模倣の制約、(b)大規模なデモンストレーター群、(c)情報表示の制約という 3 つの要素を導入した実験を実施する。この研究は、社会学習研究の理論的発展とデジタルサービスの実践的課題の接続を試みるものである。

P24：★◎繋がりと自由を求める心によって発生する孤立のメカニズム解明に向けたモデル提案(研究計画)

名嘉琉星（北陸先端科学技術大学院大学）
橋本敬（北陸先端科学技術大学院大学）
佐藤尚（沖縄工業高等専門学校）

孤独感は社会的繋がりを維持するシグナルとして進化したと言われている。社会的孤立に至りやすい性質やそれが人々に与える影響の研究は進んで来たが、孤立の発生メカニズムの解明はまだ不十分である。本研究では、他者との繋がりと、自身の目的を妨げられず達成したいという自由の、両方を求める傾向性を持つ個体たちの相互作用から、群れと孤立の発生を統一的に説明することをめざす。そこで群れ行動を基にしたマルチエージェントシミュレーション実験で孤立発生過程を分析する。提案モデルの個体は、1）ある範囲にいる周囲の個体へ接近し、2）個体ごとに決める目標地点へ移動する。そして、十分繋がりを得られない個体に孤独感が生じ社会的な行動が変容すると考える Shamay ら(2024)の説を基に、個体に生じる孤独感とその行動への影響を組み込む。発表では自由や繋がりを求める生物学的基盤を含むモデルの妥当性や実験結果について議論したい。

P25：★〇非言語音に対する音声言語表現の収斂過程(研究計画)

服部楓（九州大学大学院）
宮内翔子（九州大学）
橋爾和秀（九州大学）

ニワトリの鳴声など擬音語などオノマトペは、従来言語が持つ形式を持ち感覚を創造的に描写するが、同時に言語の慣習性やそれに付随する要因によって制限される。例えば、ニワトリの鳴声を言語内の音で表現するときに現代の日本語では「コケコッコー」、平安時代初期には「カケロ」、また他言語のドイツ語では「キケリキー」と表すように、その言語の音韻体系に則って表現される。こうした表現は同一言語話者内で伝達性を持つが、異なる言語文化をもつ者には理解が難しい。また、このような慣習的な表現を持たない非言語音（例えばポンプで空気を入れる音）に対する言語表現は少しずつ異なる。そのため、本研究では同一言語話者内でもどのように特定の音声表現に収斂していくのか検討するため、非言語音を言語音で模倣し、その言語音声模倣を伝言ゲームを模したパラダイムによって伝達させることで、音から言語への適応過程について明らかにする。

P26：私的評価下の間接互恵性：Fujimoto & Ohtsuki 2024 の実証実験（研究計画）

和田幹彦（法政大学）
藤本悠雅（サイバーエージェント AI Lab）

「コストのかかる第 3 者罰」は、行使者に「集団で高い評判を得て、次には他個体が罰行使者に協力する報酬」がある「間接互恵性」が機能している故に、協力行動を維持すると考えられてきた。先行研究では集団全体から特定個人への「公的評価」共有が前提（Nowak & Sigmund 1998)だが、2024 に集団内個人が心の中にのみ持つ「私的評価」下でも間接互恵性が機能し、協力達成可能な社会規範が存在する数理モデルが示された（Fujimoto & Ohtsuki 2024)。この数理モデルを実験室実験で検証する。同時に示唆される仮説：≪約 50 万年前の言語進化より前の初期ヒト属集団で、情報共有が困難でも「私的評価」下で間接互恵性が機能し得たため、第 3 者罰も維持可能であった≫の検証も試みる。実験参加者は recipient に協力・非協力を決定する donor を、異なる評価ルール下で「良い・悪い」と評価する。

P27：◎改変型先制攻撃ゲームによる武力保持・攻撃抑止の規定因の検討（研究計画）

大薗博記（鹿児島大学）
仲間大輔（リクルートマネジメントソリューションズ）
上條良夫（早稲田大学）

ヒトが道具使用を始めて以来、それは時に武器としても使用され、その保持や使用の意思決定は適応を左右してきただろう。また、現代でも、核保有や銃保持を巡る社会問題が存在し、武力保持や使用の規定因を探るのは重要である。先行研究（Ozono & Nakama, in press）では、2 者間で攻撃ボタンを押すか否かを決定する先制攻撃ゲームを改変し、攻撃決定の前にボタンの保持/不保持選択を行わせる「保持選択付き先制攻撃ゲーム」を開発し、武力保持の規定因の一つとして「武力均衡を求める傾向（相手の保持可能性が高いほど、自らも保持する傾向)」を見出した。今後は、同様の実験パラダイムを発展させ、攻撃された側の反撃を可能にすることや、攻撃力の大小を操作することを通じて、保持の促進や攻撃抑止のメカニズムを検討する予定である。本発表では、大学生を対象とした想定実験の結果を紹介しながら、今後の計画を議論したい。

P28：◎複数レベル淘汰理論に基づくコミュニティ・ウェルビーイングの分析（研究計画）

小田亮（名古屋工業大学）

本研究の目的は、実際のコミュニティを対象に、メンバーの利他性やコミュニティの安定性に寄与する要因を複数レベル淘汰理論（multilevel selection theory）から明らかにすることである。複数レベル淘汰理論から、利他性はグループ内の分散が小さく、グループ間の分散が大きい条件において進化しうることが予想される。実際に、ヒトは外見や性格、思想などが似ている相手に対してより利他的になることが、いくつかの調査や実験において明らかになっている。本研究では、名古屋市の 3 つの学区に在住する市民を対象に、行政や町内会の協力のもとで質問紙調査を実施する。質問紙は各学区に約 500 部の配布を予定している。市民が日常的に関わりをもっているコミュニティへの満足度や愛着、メンバーの利他性といったコミュニティの活性や持続性の指標には、メンバー間の形質の類似性が寄与しているという仮説を検証する。

P29：◎発明のリスクに起因する技術的・物質的格差形成に関する実験室実験（研究計画）

小林豊（高知工科大学）
中分遥（北陸先端科学技術大学院大学）
豊川航（理化学研究所）

本研究では、リスク認知という個人の心理的要因が技術開発に影響することで、社会的格差といったマクロの現象を生み出すメカニズムを探求する。本研究のために新たに設計された「仮想漢方薬課題」では、各参加者は「出来るだけ効能の高い漢方薬を調合して高値で売って財を成す」というゲームに取り組む。ただし処理条件では、貯蓄が尽きた時点でゲームは終了となる。そのため貯蓄量に不安を感じるプレイヤーは失敗のリスクを恐れて新薬の調合を避ける一方、貯蓄量が十分だと感じるプレイヤーはリスクを恐れず改良を行い、高値の薬を開発できる。ひとたび高値の漢方薬を手に入れたプレイヤーは益々余裕が出て発明に投資できるので、プレイヤー間の格差がさらに開いていくことが予想される。本研究では、貯蓄が尽きてもゲーム続行を許す「借金可能条件」との比較により、こうしたリスク認知やその個人差が格差形成において果たす役割を解明する。

P30：★〇文化における先住者効果の実験的検討：初期文化が後続の文化構成に与える影響

越水麻央（安田女子大学）
遠藤瑠愛（安田女子大学）
須山巨基（安田女子大学）
柴﨑祥太（国立遺伝学研究所）
中臺亮介（横浜国立大学）
中分遥（北陸先端科学技術大学院大学）

人間の文化は地域や集団ごとに異なる構成が見られる。こうした集団間の文化構成の違いはどのように生まれるのか？本研究は、生態学における先住者効果に着目する。先住者効果とは、種がある環境に移入する順序によって、最終的な種構成が異なることであり、初期に侵入する種がその後に侵入する種の構成に影響を与える概念である。本研究では文化においても初期に侵入した文化形質が、その後の構成に与えることで集団間の文化構成に多様性が生じることを実験室実験によって検討する。実験では、参加者が架空の世界で複数の道具を用いて狩りを行う課題を行った。道具は参加者の狩りパラメータ（例，攻撃力）を高める設定となっていた。参加者は、最初にランダムに武器を渡され、その後、特定のパラメータを強化できる道具を複数回選択した。予備実験の結果、参加者が選択する道具群は最初に入手した武器によって制約を受ける傾向が見られた。

P31：★階層ベイズ学習モデルによる濃密関係理論（Hardin, 1993）の再検討

齋藤悠輔（北海道大学）
竹澤正哲（北海道大学）

人はなぜ見知らぬ他者を信頼するのか？Hardin (1993) の濃密関係理論によれば、信頼に足る人が多い社会では、日々の経験から他者に対する信頼が学習され、さらに見知らぬ他者に対しても一般化される。つまりこの理論に従えば、一般的信頼の文化差は信頼に足る人々の多寡によって説明されることになる。本研究の目的は、Hardin の濃密関係理論を階層ベイズ学習モデルによって定式化し、その概念的有効性を再検討することにある。もし人々が階層ベイズ的に他者一般の性質を推定するならば、信頼に足る人が同率でも、相互作用の統計構造の違い（e.g., 過去に相互作用した人数と回数）によって、一般的信頼が変化しうる。一連のシミュレーションの結果、より関係が開かれた社会ほど一般的信頼を真値よりわずかに高く推定した。また、一般的信頼は個人レベルより集団レベルの信頼度に強く依存した。

P32：★◎不公平な慣習が創発する条件: 進化シミュレーションによる検討

山本嵩記（広島修道大学）
中西大輔　（広島修道大学）

本研究では不公平な慣習がどのような条件で創発するかを Cochran & O'Connor (2019) の生産・分割ゲームに基づいて進化シミュレーションにより検討した。ゲームでは、行為者は無作為に他の行為者とペアとなり、どの程度生産に貢献し、どの程度分割を求めるかという 2 段階の意思決定を行う。ペアの貢献度の合計が不足していたり、生産された量を超える財の分割を求めたりすると両者とも資源を得られない。先行研究では不公平な慣習が一定程度発生する可能性が示されていた。本研究では生産と分割の段階数を操作し、その数が増えるほど平等で公平な慣習の発生頻度が減少することが確認された。また、特定の均衡の成立がどの程度慣習的かを情報量の基準を用いて比較したところ、段階数の増加に伴い平等で公平な均衡の慣習（恣意）性の程度が高くなるパタンが得られた。

P33：★◎間接互恵状況における罰の評判獲得説のシミュレーションによる検討

尾崎大翔（東京大学）
井原泰雄（東京大学）

社会的ジレンマにおける協力を説明する要因として、罰と間接互恵性の 2 つが有力である。このうち、罰には 2 次のフリーライダー問題が伴うが、これを解消する理論として、罰の評判獲得説が提唱されている。評判獲得説では、罰行使者は良い評判を得て、他者から相互作用相手として選ばれやすくなるため、罰行使が適応的な行動になると考える。本研究では、間接互恵性の枠組み（image scoring 戦略）を用いて進化シミュレーションを行い、第三者罰における評判獲得説の可能性を検討した。その結果、罰行動によって評判が上昇する場合、協力が成立しやすくなるという結果が得られた。また、非協力状況から協力状況に移行するタイミングでは、罰行使は適応的な行動となることがわかった。そのほか、罰による評判上昇を仮定しない条件でも、罰行動を評価基準に利用する形質が集団に現れうることが確認された。

P34：★◎チープな協力意図シグナルの進化と模倣戦略の共存条件: シミュレーションによる検討

渡邊裕季乃（東京大学）
大坪庸介（東京大学）

協力の進化にとって重要な正の同類性（協力者同士がつきあいやすいこと)を生じさせるメカニズムのひとつとして、協力意図シグナルに基づくパートナー選択が考えられる。従来の議論では、正直な協力意図シグナルには非協力者による模倣を抑制するためのコストがかかっていなければならないとされていた。しかし、Roberts（2020）が提唱した協力意図シグナル戦略は、そのシグナルコストが足かせになり非協力者の集団に侵入することができない。そこで、本研究では、協力意図シグナルのコストを低くすれば協力意図シグナル戦略が非協力者集団に侵入できるのか、その場合、シグナル模倣戦略によりシグナルの正直さが損なわれるのかをシミュレーションにより検討した。その結果、チープな協力意図シグナル戦略が非協力者集団へ侵入可能で、かつ集団に広がった後も少数のシグナル模倣戦略と安定して共存できる条件が存在することが明らかになった。

P35：★◎環境圧下での協力量と関係離脱閾値の進化

小楠なつき（理化学研究所）
豊川航（理化学研究所，コンスタンツ大学，マックスプランク動物行動研究所）

コストを伴う協力を繰り返し行う場合において、非協力的な相手と関係を保つことは、協力的な相手と関係を保つ場合と比べて損である。この場合、新たな相手と組むために相手から離れるという選択は、搾取を防ぎ、協力量を保つ効果が期待される。一方で、よりましな相手が見つからない、長期的な関係を保つことで得られるはずだった利益を捨ててしまう、といった危険性も孕む。特に、生存のために一定以上の協力量が必要である場合、これはより深刻な問題となり得る。
本研究では、個体の資源状態が世代時間内で変化し、資源枯渇時には死亡するという仮定のもと、既存関係から離脱可能な場合と、離脱不可能な場合について、様々な環境圧について個体ベースシミュレーションを行った。ある環境圧の元では、離脱可能である場合のほうが、かえって協力の崩壊が生じやすいことが示された。本発表では、このモデルについて、関係流動性理論との比較も交えて議論する。

P36：★◎幼少期の戦争関連ストレスの経験は早い繁殖開始と関連するのか？

米谷充史（神戸大学）
大坪庸介（東京大学）

Psychosocial Acceleration Theory（PAT; Belsky et al., 1991）によれば、幼少期に逆境を経験した女性は繁殖開始が早い傾向がある。これは死亡リスクが高い環境への適応として進化した表現型可塑性であると考えられており、逆境経験と早い繁殖開始時期の関連を示す知見も報告されている。本研究では、幼少期の逆境経験として戦争関連ストレスに着目し、PAT の予測を検討した。第二次大戦で日本への空襲が本格化した 1944 年に 0–5 歳であった女性を母親とする、現在 40–70 歳の日本人男女を対象に調査を行った。母親の戦争関連ストレスは、回答者が母親の戦時中のストレス経験について直接的・間接的に聞いたことがあるかどうかで操作的に定義し、それと母親の初産年齢の関連を検討した。その結果、戦争関連ストレスは低い初産年齢と関連しておらず、PAT の予測は支持されなかった。

P37：★◎“思春期”のニホンザルにおけるオス間関係

片岡直子（京都大学）

ニホンザルには、ヒトの思春期と同様に、性成熟を迎えても繁殖には最適でなく、身体的・性的発達が続くワカモノ期が存在し、社会性を育む上で重要な時期であると考えられている。ニホンザルのワカモノ期における社会関係を検討することは、ヒトの思春期における社会性の発達やその進化的基盤を明らかにする上で重要である。本発表では、ワカモノ期のオスのヤクシマザル(Macaca fuscata yakui)を対象に、オス同士の社会関係を検討した。追跡したワカモノオス 7 個体において、順位序列は毛づくろいの平等性や被攻撃頻度などの社会行動に関係していたが、オトナ個体間で一般にみられるような厳格さや直線性はなかった。また個体間の親密度は年齢や群れへの在籍年数によらず、特定のペアを除いておおむね一様だった。以上のことから、ワカモノ期のオスはオトナに比して順位序列が曖昧で未分化なネットワークを形成していることが示唆された。

P38：★思春期の関係流動性と成功者への評判期待：思春期-成人期間の比較による検討

前田友吾（玉川大学）
田中大貴（玉川大学）
山田順子（立正大学）
結城雅樹（北海道大学）
高岸治人（玉川大学）
松田哲也（玉川大学）

本研究では、思春期と成人期のデータを用いて、社会環境である関係流動性と評判期待の年代差を検討した。思春期は、家族と比べて同世代との生活時間が増加するという社会環境の変化や、社会脳の発達および周囲からの評価への敏感さといった認知的特徴を持つ。これらの特徴を踏まえ、本研究は思春期と成人を比較することで、思春期特有の社会環境と評判期待の認知的特徴を明らかにすることを目的とした。

思春期 224 名と成人 400 名のデータセットを用いて、社会環境変数として関係流動性を、評判期待として成功賞罰信念を比較した。その結果、関係流動性には思春期と成人の間に差はみられなかった。一方、成功賞罰信念には違いがみられ、成功賞信念は成人よりも思春期で高く、成功罰信念は思春期よりも成人で高かった。また、先行研究で確認された関係流動性と成功賞罰信念の関連性は、思春期でも成人でも同様の傾向がみられた。

P39：★◎内受容感覚の法則性と物語性

中井美佑（奈良女子大学大学院）

内受容感覚は、身体内部の状態や刺激に対する感覚として恒常性の維持に欠かせない。一方、自己の状態に注意をむける自己意識や、他者の状態を察知する社会認知にも影響する。本研究では、内受容感覚の時間的特性に注目し、「今ここ」の自己の状態をどの程度正確に捉えているかを内受容感覚の法則性、過去から未来につづく自己の状態をどの程度連続したストーリーとして捉えているかを内受容感覚の物語性と定義し、それぞれを定量化することによりそれらの関連と特徴を調査した。実験は、心拍フィードバック課題(法則性の測定)、場面想定法を用いた身体愁訴に関するインタビュー(物語性の測定)、質問紙による心理尺度の測定を行った。その結果、個人のもつ内受容感覚の法則性と物語性に相関関係はなく、両者のバランスが認知的共感の高さに影響することが示された。

P40：★◎“物語が人を動かす”とはいかなることか　-テキストデータ分析による実証研究-

古川建（北陸先端科学技術大学院大学）
橋本敬（北陸先端科学技術大学院大学）

物語は集団現象の発生に寄与するとされ(Gottshall, 2021)、それは個々人の行為が触発されたためだとされるが、物語と行為との因果は実証されたとはいえない。そこで本研究は、物語の流布が実際に人々の行為の喚起に影響を及ぼし、結果として集団現象につながるプロセスを明らかにすることを目的とする。ここで物語(Narrative)とは、人の説得的な意思疎通や予測行為を可能にする情報の形式であり、本研究では「あるイベントを中心として、連鎖的に生起するイベントを、擬似因果的つながりを持つものとして認識したもの」とする。この物語性を定量的に捉えるため、物語内の暗転や好転など状況の転換点である「逆転」の数や大きさ（Knight et al. 2024)を指標とする。集団現象例としてクラウドファンディングに着目し、典型的な物語とは言えない文章である専門サイト上の募集文について物語性を算出し、支援率等の成功指標との関係を分析した。発表では他の探索的分析の結果と併せて議論する。

P41：発表取り下げ

P42：思春期におけるデフォルトの社会的選好が向社会行動と意思決定時間との関連に及ぼす影響の検討

田中大貴（玉川大学）
山田順子　（立正大学）
石原暢　（神戸大学大学院）
松田哲也　（玉川大学）
高岸治人　（玉川大学）

これまでの研究によって、経済ゲームにおける向社会行動とその意思決定時間の関係が、デフォルトの社会的選好のひとつである社会的価値志向性(SVO)によって調整されるという結果が報告されている(Yamagishi et al., 2017)。本研究では、この SVO の調整効果が成人以前の段階にもすでに存在するかを、9 歳から 18 歳までの思春期世代(N = 225)のデータを分析することで検討した。実験に使用した経済ゲームを、他者からの搾取リスクがあるもの(PDG, SDG)とそうでないもの(DG, TG (trustee))に分類して分析した結果、後者でのみ成人と同様のパターンにて SVO の有意な調整効果が認められた。この結果は、成人で見られた SVO の調整効果が、それ以前の思春期において意思決定の文脈に応じて異なる発達過程を経ていることを示唆している。

P43：◎若年男性のリスク傾向は身体能力の正直なシグナルか？

川添裕太郎（東京大学）
大坪庸介（東京大学）

男性は様々な領域で女性よりもリスク傾向が高いことが一貫して報告されている。この性差について、男性においてのみリスク傾向と適応度（繁殖成功度）に正の相関が見られるという性淘汰の働きを示唆する結果が報告されている。このような性淘汰が働く機序として、男性のリスク行動は自身の身体的強さを周囲にアピールする正直なシグナルとして機能するという仮説が存在する。そこで本研究では、男性のリスク傾向は身体能力の高さと相関しているという仮説を検証するため、男性のリスク傾向と若年期のスポーツ経験（高校・大学時代の部活動での地区大会入賞および地方・全国大会への出場等）との関連について 35～60 歳の日本人男性を対象とした質問紙調査を実施した（N=441）。分析の結果、学生時代にスポーツで優れた結果を収めた参加者の方がそうでない参加者よりもリスク傾向が高く（仮説を支持）、早い時期に結婚し、子を成していることがわかった。

P44：◎アロマザリングのメリット・デメリット：哺乳類全般と現代ヒトの比較

齋藤慈子（上智大学）
永澤巧（上智大学，帝京科学大学）
岡田紗苗（上智大学）
山田文（上智大学，目白大学）

哺乳類では、およそ 90%の種で母親のみが子育てを行うが、種によっては母親だけでなく、父親、親以外の個体も子育てを行う。これらの共同繁殖種では、子の世話を行う母親以外の個体はアロマザーと、またその世話行動はアロマザリングと呼ばれる。共同繁殖は、子育ての負担が大きい種で見られる傾向があるが、子育ての負担の大きさから、ヒトも共同繁殖種であるとされる。アロマザーは子どもの血縁個体であることが多いが、包括適応度の上昇だけでなく、直接的な適応的メリットも指摘されている。また、アロマザリングをすることで適応度が下がる側面もある。本研究では、哺乳類の共同繁殖種の先行研究からみえるアロマザリングのメリット・デメリットを列挙し、それらと現代ヒトの語りからみえるメリット・デメリットを比較した。その結果、哺乳類の知見からは見出されなかった現代ヒト特有のアロマザリングにおけるメリットやデメリットが見出された。

P45：◎APIM による生活史戦略とパートナー暴力の重篤度との関連の検証

喜入暁（周南公立大学）

パートナー暴力は，進化的な文脈では配偶者保持行動の一つであると考えられる。本研究では，パートナー暴力の重篤度が生活史戦略の個人差およびパートナーの生活史戦略の個人差によって説明され得るかを検証した。生活史理論に基づけば，強制的な関係維持（vs. 良好な関係維持）は，早い生活史戦略であるほど取られ，また，それはより重篤な形態がとられると考えられる。そこで，生活史戦略およびパートナー暴力の程度（重度・軽度×加害・被害）を測定し，生活史戦略と軽度暴力を説明変数，重度暴力目的変数とした APIM による解析を行った。結果，行為者・パートナー効果いずれも有意ではなく，(女性による加害を除く)各軽度暴力が各重度暴力を予測した。ただし，年齢を統制変数として投入すると，女性被害での軽度から重度へのパスは有意ではなくなり，また，女性の年齢が高いほど女性の重度暴力が低いことが示された。

P46：なぜ観光地で規則は破られるのか？―「SNS 映え」を狙った立ち入り禁止エリアへの侵入行為の背景にある心理メカニズム

松本晶子（琉球大学）
大城幸太（琉球大学）
Li Yang（名古屋大学）

本研究は、観光地での「SNS 映え」を狙い、立ち入り禁止エリアへの侵入する行為の背景にある心理メカニズムを進化心理学的に検討することを目的とした。WEB アンケートにより、他者の行動や個人の価値判断が侵入意欲に与える影響を調査した。その結果、他者の目や同調行動といった「評判懸念」よりも、「価値ある体験を逃したくない」という個人の利得が、迷惑行為を促進する要因として強く作用することが明らかとなった。

P47：◎文化レベルに依存する言葉の伝播モデル

大橋由佳（奈良女子大学）

柳田國男は「蝸牛考」で都を中心として「カタツムリ」の古い呼び方が外側に、新しい呼び方が内側に分布することを示している。呼び方は外側から「なめくじ」、「つむり」、「かたつむり」、「でろ」、「まいまい」、「でんでんむし」の順に分布している。都から離れた東北地方では日本海側に「かたつむり」、太平洋側に「たまくら」の呼び方が分布し、中国地方では古い呼び方が新しい呼び方よりも内側に分布している箇所が存在し、中心部周辺の外側に向かうほど古い言葉が広がる分布とは異なっている。本研究では、中心の都から文化と言葉が広がるとし、文化レベルに依存して言葉が伝播するモデルを作成し、言葉の分布を説明することを試みる。

P48：★◎社会的疎外感を測定する新たな尺度の提案：アイデンティティ融合尺度を用いて（研究計画）

森下丈（北陸先端科学技術大学院大学）
中分遥（北陸先端科学技術大学院大学）

社会的疎外感とは孤独感とは異なり、ある集団に属しながらも、社会で主流とされる枠組みから逸脱した立場に置かれる際に起こる感情である。これまで社会的疎外感を測定する方法として、言語報告を主軸とした心理尺度が提案されていた。しかしフィールド調査を行う際、地域や集団によっては識字率や教育制度が十分に整っていないことから、言語に依存する心理尺度を用いた調査が困難な場合がある。本研究では新たな方法として、Swann et al.（2009）が開発したアイデンティティ融合尺度という心理測定法を応用する。この尺度は個人と集団を模した 2 つの円を用意し、その距離を尋ねることで直感的な回答を可能とするもので、これによって社会からの疎外感を測定する。従来の疎外感尺度と新尺度とを比較し、両者の一貫性を確認することで、言語を主軸とする調査が困難な人々に対してより容易な測定を実現する尺度の提案を行う。

P49：★◎ウェブデータからクラシック音楽の流通パターンを探る：生態学の分析手法を応用したショートリスト効果の検証(研究計画)

長嶋城（北陸先端科学技術大学院大学）
中分遥（北陸先端科学技術大学院大学）

音楽や映画などの文化商品を選択する際に，ショートリスト効果が働くことがある。これは文化商品を展示するスペースやそれを設置する労力が有限であることから，資源の乏しい環境では，より選択的になり，かつ魅力のある商品が選ばれやすくなる傾向を指す。Morin and Sobchuk (2021) は，映画のデータセットにおいてショートリスト効果が働いていることを確認した。また，生態学に基づくネスト性を分析する手法を応用して，過大評価および過小評価されている映画を特定する手法を提案した。本研究では，Wikipedia 上のクラシック音楽に関連するデータセットにおいて，こうしたショートリスト効果が再現されるかどうかを検証する。また，地域ごとの文化データの分布からネスト性を分析することで，音楽の流通パターンについて考察する。

P50：★◎母系制・父系制の社会制度進化に関する数理モデル研究（研究計画）

髙良力樹（東京大学）
井原泰雄（東京大学）

父系制と母系制は親族関係の構成や財産相続の形態などの特徴で分類され、世界中の民族や集団においてみられる社会制度である。その進化的起源や制度間の移行の要因に関してはいくつかの議論があり、民族誌データの解析や居住形態の点から考察した研究は多くある（e.g. Holden & Mace, 2007; Ting et al., 2016）。他方で母系父系の定義から、また個体の繁殖成功度という点からも財産相続や投資の分配は大きな要因の一つであると考えられるがそのような観点から社会制度の進化を扱った研究はあまりない。本研究では移動と交配のみを想定した先行研究の配偶行動モデルに財産形態や血縁者への投資の概念を導入することで、母系や父系といった社会制度の進化の方向性がどのように変化するかを考察することを目的とする。

P51：★◎多数派同調バイアスはどの場面で観察されるか?: 線形と閾値公共財ゲームを用いた実験的検討（研究計画）

棗田みな美（広島修道大学）
横田晋大　（広島修道大学）
中西大輔　（広島修道大学）

人々が多数派の行動に対して過度に同調する傾向（多数派同調バイアス）は、協力や非協力的均衡を形成し、集団淘汰によって協力の進化を促す要因になり得る。しかし、実際の協力行動において多数派同調バイアスがどのような状況で生じるかは明確でなく、特に、異なる利得構造において同調バイアスの傾向が変わるのかは十分に明らかではない。本研究では、利得構造が異なる２種類の公共財ゲーム（線形公共財／閾値公共財）を用い、多数派同調バイアスが観察されるか、および、試行の過程を通じてバイアスを表すＳ字関数がどのように変動するかを検討する。文化的群淘汰理論に基づけば、両構造において多数派同調バイアスが発揮されると予測される。一方、本研究では多数派同調バイアスが観察されない可能性にも着目し、特に閾値公共財では限界逓減の利得関数を持つ場合があるため、逆同調のバイアス（多数派と逆の行動を過度に取る傾向）が発生するかも検討する。

P52：★◎機会の不平等がある中では功利主義的な結果の不平等が容認されるか（研究計画）

浦山恵（九州大学大学院）
関元秀（九州大学）

メンバーの効用の総和最大化を目指す功利主義は、よく行政の方針となる一方で、一部個人の効用を侵害したり、個人間格差を発生・拡大させたりもする。ヒトが功利主義を好むか否か、従来のトロッコ問題に加え、実験参加者にとっての内集団と外集団をつくり、そこから抽出した２者への報酬を実験参加者が決定する最小集団パラダイムを用いて検証されてきた。幼児を除くほぼ全ての実験参加者が、総和が大きい功利主義的報酬セットでなく、格差のない平等主義的セットを好む傾向が見られた。これら先行研究が着目した「結果の不平等」以上に「機会の不平等」が近年問題視される。本計画では、機会が不平等かつ結果に格差が無いペアでは機会が不利だった方の報酬を増やす功利主義的選択が採用される等の仮説を検証する。機会不平等・結果無格差条件に加え、機会平等･結果格差有り条件などを提示し､最終的な報酬を実験参加者が決定する実験を計画している。

P53：★FBO 効果が人口動態に与える影響(研究計画)

赤木哉巴（北海道大学）
中岡慎治（北海道大学）

Fraternal Birth Order(FBO)とは、男性の性的指向と相関関係にあり、同じ母親から生まれた兄の数が多いほど同性愛志向になる確率が高くなる効果のことである(Blanchard,R., & Bogaert,A.F.,1996)。同性愛の発生要因についての主張が数多く見られる中、FBO は生物人口統計学的に有意に相関があるとされ、同性愛との関係が強く示唆されている。しかし、FBO による同性愛者集団数への寄与はほとんど調べられていない。本研究では、Agent-based model を構築し何百世代にわたる交配をシミュレーションし、同性愛者や異性愛者の人口動態の変化を追跡する。また、兄弟の繁殖に寄与する血縁淘汰説や社会の寛容度がそれらの人口動態に影響を及ぼすことが示唆されているのでそれらについても検討し、個々人および社会が取りうるべき方策の検討および提案に繋げることを目的とする。

P54：★言語の進化過程の解明（研究計画）

中野来喜（総合研究大学院大学）
大槻久（総合研究大学院大学）

全世界で 7000 程度の言語が話されている。この多様性を生み出した過程の理解は、言語学や人類学にとって重要である。しかし、理論的には十分に議論されておらず、地理的な隔離が要因として挙げられている程度である。そこで本研究は特に言語の多様化が進んだと思われる、人類の出アフリカ時の言語多様化の過程をモデル化する。

本研究では遺伝的な種分化のモデルを基に時間経過による言語の分岐を考える。このモデルでは、複数の島が並んだ状態を仮定し、隣接する島間で移住が起こる。各島には１つの言語が存在し、時間と共にその言語を構成する単語が変化するとし、言語間で用いられる単語が大きく異なるようになった時に、言語が分岐したと考える。本研究では言語を均質化する効果をもつ移住と言語を多様化させる単語の突然変異に加え、新たに生じた単語の固定確率に影響する集団サイズや集団間の社会的地位などの要因も考え、言語の多様化プロセスを解明する。

P55：★◎感性考古学：昭和の若者のユーモア感性の復元および令和の若者との比較（研究計画）

森智哉（九州大学大学院）
関元秀（九州大学）

「笑い」という感情、すなわちユーモアの感性は、その平均値が時代と共に変化し、さらに個人の内面においても経年変化する可能性がある。時代変化に関して、現代の若者に昭和時代の漫才映像を視聴してもらう実験を行ったところ、彼らの「笑いどころ」は映像内の観客（昭和の若者）が反応した箇所と異なることが確認された。しかし、同様に現代の漫才映像を昭和時代の若者に視聴してもらい「笑いどころ」を調べることは、直接的には不可能である。そこで本研究計画では、機械学習によって昭和の若者の感性を「復元」し、時代間での若者のユーモア感性の違いを明確にすることを試みる。具体的にはマルチモーダル人工知能に、映像内の観客の笑い声の有無ラベルつきの昭和漫才動画を学習させることで、「昭和の若者の笑いどころ」判別器を作成する。完成した判別機に令和の漫才動画を入力し、判別器の出力結果と現代の若者の「笑いどころ」とを比較する。

P56：◎音声から伺えるヒトが環境を求める感情的動機の解明とその進化的背景（研究計画）

小野原彩香（立教大学）
大内啓樹（奈良先端科学技術大学院大学）

本研究は、ヒトがニッチ構築した環境と音声に含まれる感情との関係を解明することを目的とする。具体的には、音声感情分析ソフトウェア（Open Smile など）を用いて実験参加者の発声から感情を分析し、その結果に基づき、場所に関する口コミ情報（Yahoo!ローカルサーチ API など）を活用して、感情に基づく最適な場所を推奨するシステムを構築する。参加者には提案された場所が自身の感情状態に適しているかどうかを評価してもらい、その評価結果に基づき感情と環境の関係性を明らかにする。また、Odling-Smee らのニッチ構築理論に基づき、ニッチ構築環境がネガティブな感情反応を引き起こさないことも検証する予定である。本発表を通じて、研究方法の妥当性について議論を深めたい。

P57：◎情報伝達における情報の抽出と圧縮方略：伝達相手の年齢による影響（研究計画）

岸本励季（九州大学大学院）
橋爾和秀（九州大学）

民話や都市伝説といった口頭伝承は、ヒト文化で普遍的に見られる。その口頭伝承には、生存や道徳に関する情報が含まれるといった共通したパターンがみられ、有益な情報を学習し、伝搬する役割があると考えられる。そこで、本研究計画では、情報を他者に伝達する際に、その相手の年齢が伝達に影響を与えるかを検討する。伝える相手の年齢群によって、伝える情報の取捨選択、および、情報をいかに圧縮、または誇張するかに違いが出ると予想した。生成 AI にて作成した 1 分程度の寓話を、4-10 歳の子どもを持つ成人参加者に音声で呈示し、自身の子ども、もしくは、普段よく話す成人を 1 名思い浮かべながら、再生するように求める。再生された情報とオリジナルの情報を比較し、どういった情報が選択されやすく、情報がどのように抽出され、圧縮されるかを検討する。また、それらの方略が、伝達相手の年齢によって変わるかを検討する。